帝京大学医学部附属病院　院内誌

Take Free

T-me チーム

40号

特集

臨床遺伝診療センター

目次

特集　臨床遺伝診療センター

臨床遺伝医療とは？
産婦人科　主任教授　臨床遺伝診療センター長　長阪 一憲先生

臨床遺伝診療センターの現場
認定遺伝カウンセラー　認定家族相談士　平岡 さゆりさん

各科の専門家が集う、チーム医療の現場から
臨床遺伝診療センターを支える12人の声

04

業種別 INTERVIEW
看護師　梅井 彩さん
薬剤師　武井 優輝さん

16

遺伝医療に関する基礎知識とQ&A

18

チーム医療
森山 亜美さん　中央検査部

19

Topics & News
帝京大学医学部附属病院からのお知らせ

◎発行年月
2026年8月
◎発行
帝京大学医学部附属病院
総務課広報企画係
◎編集・制作
ビーデザイン

T-me

T-me「チーム」は、
帝京大学医学部附属病院と
地域の皆さまをつなぐ院内誌です。

T:Teikyo ＝帝京大学医学部附属病院の頭文字

me:Medical ＝地域の皆さまのための医療

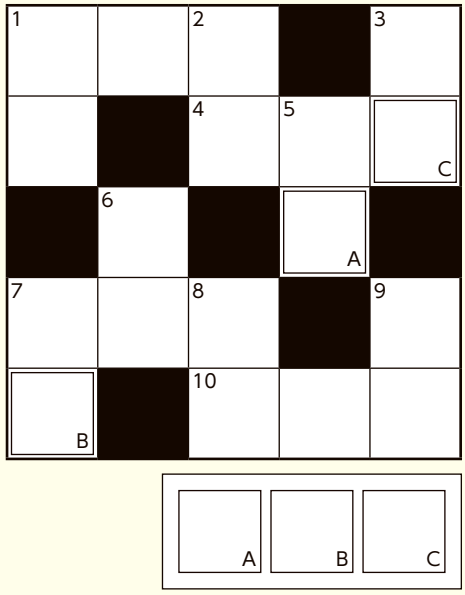
また、「チーム」には
医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、
その他病院全てのスタッフが連携して行う
チーム医療の意味も込められています。

本誌の掲載内容は、2026年7月現在の情報に基づいております。

printed in japan
本紙掲載の写真・記事の無断転用を禁じます。
©2026 帝京大学医学部附属病院

クロスワードパズル

二重ワクの中に入る文字をアルファベット順につなげると、
親から子へ受けつがれるもの＝○○になります。



（ヨコのカギ）

1 武士が腰にさしていた、片方に刃のある武器
4 こたつのおとも。冬が旬のオレンジ色のくだもの
7 夏の夕涼み、パタパタあおいで風をおこす
10 旅行時のかばんや、トラックに載せる○○○

（タテのカギ）

1 横歩きが得意、ハサミを持った海の生きもの
2 海でザブーンと打ち寄せるもの
3 小さな印。サイコロの目にもあるこれ→・
5 海辺で拾える、二まいや巻きのから
6 ♪ブンブンブン○○がとぶ♪
7 肩から手首までの部分
8 川にひそむ、大きな口とするどい歯のは虫類
9 外を歩くとき足にはくもの

（答えは P.19）

特集

臨床遺伝診療センター

ある日、「その病気、遺伝子が原因かも」と告げられたら……。
この病気は、親から遺伝したということなんだろうか？
そして、我が子にも受け継がれる可能性があるのだろうか？
将来に影響があるのだろうか？
不安を感じたとき、頼れる場所があります。

帝京大学医学部附属病院では、
診療科の壁を越えて患者さんとご家族を支える
「臨床遺伝診療センター」が誕生しました。
遺伝にまつわるあらゆる疑問や不安を、
専門チームがともに受け止めます。
検査や治療だけでなく、
その人の人生に寄り添う――
そんなチームをご紹介します。

臨床遺伝医療とは？

病気と向き合い、人生の選択を支える「臨床遺伝医療」

臨床遺伝医療とは、遺伝子や染色体に関わる病気の診断・治療・予防を支援する医療です。がんや神経難病、出生に関わる領域まで幅広く関わり、患者さんだけでなくご家族の人生にも深く寄り添います。帝京大学医学部附属病院の臨床遺伝診療センターでは、臨床遺伝専門医4名、遺伝性腫瘍専門医3名、認定遺伝カウンセラー3名（常勤1名、非常勤2名）が診療にあたっています。多職種が協働し、遺伝医療の質を高めるセンターとして2026年、新たに設立されました。

主な対象疾患

遺伝性腫瘍症候群	遺伝性乳がん卵巣がん（HBOC）、Lynch症候群、多発性内分泌腫瘍症1型・2型（MEN1型、MEN2型）、大腸ポリポーシス（FAP）、Li-Fraumeni症候群、Cowden病、神経線維腫症Ⅰ型（NF1）など
骨・結合織・血液・循環器疾患	軟骨無形成症、骨形成不全症、Marfan症候群、Ehlers-Danlos症候群、肥大型心筋症、QT延長症候群、オスラー病など
神経・筋疾患	脊髄小脳変性症、筋ジストロフィー、ミオパチー、家族性アミロイドポリニューロパチーなど
腎尿路系疾患	多発性嚢胞腎、アルポート症候群など
先天代謝異常症	ライソゾーム病、フェニルケトン尿症、副腎白質ジストロフィー、家族性高コレステロール血症など
出生前診断・染色体異常症	NIPT（13トリソミー、18トリソミー、21トリソミー（ダウン症候群））など
その他	ミトコンドリア病（MELAS、Leber視神経症など）など

長阪 一憲先生
産婦人科　主任教授
臨床遺伝診療センター長

2000年愛媛大学医学部医学科卒業。
2008年東京大学大学院医学系研究科卒業 医学博士取得。
東京大学医学部附属病院女性診療科産科などでの勤務を経て、
2017年より帝京大学医学部附属病院産婦人科にて勤務。

診療科の壁を越えた、遺伝医療の新たな拠点

帝京大学医学部附属病院 産婦人科主任教授で、臨床遺伝診療センター長を務める長阪一憲先生に、センター設立の背景や想いを聞きました。

「遺伝というものを軸に、患者さんとそのご家族が人生の選択をしていく、それが私たちの仕事です。診療科の壁を取り払い、遺伝という視点から患者さんを支援していきたいという想いのもと、2026年より本格的にスタートすることになりました。

遺伝学は以前から存在していましたが、臨床の現場に浸透してきたのはこの10年ほどのこと。遺伝子の情報によって治療内容が変わったり、家族の健康管理の考え方が変わったりするケースが増え、専門的なサポートを求める声が高まってきました。

私自身、最先端の医療に関わりたいという思いから医師を志しました。遺伝はあらゆる診療科に関わる幅広い分野であることに魅力を感じ、その中で臨床遺伝専門医の資格を取得しました。現在は、患者さんやご家族と一緒に方向性を考えていくこの仕事に、大きなやりがいを感じています」

「治す」だけではない——心に寄り添う医療

——患者さんやご家族は、どのような思いで遺伝カウンセリングの相談に来られますか？

「深く悩んでいる方もいれば、まずは遺伝に関する情報を知りたいという方もいます。大切なのは、こちらが誘導するのではなく、その方がどうしたいかを聞いてあげること。遺伝情報を調べることにはメリットだけでなく、デメリットもあります。結果を知ることで不安が増してしまう場合もある。その『どうしよう』という気持ちを、一緒に支えていくことが大切です」

——治療以上に、心に寄り添うことが大切なのですね。

「病院は、病気を治す場所というイメージがありますが、遺伝医療はその人の心も含めて見ていく特徴があると感じています。大学病院には、研究を目的とする側面がまだまだ多いところもありますが、当院では患者さんと真剣に向き合う形でやっていきたいと考えています」

——センターではどのような職種の人たちが働いているのでしょうか？

「医師・薬剤師・看護師など多様な背景を持つメンバーが在籍しています。センター化によって、これまで各診療科で属人的に対応していた遺伝に関する相談に、整備されたフローのもとで対応できるようになりました。

産婦人科医としての視点も、センターの大きな強みのひとつです。生命の誕生を扱う科だからこそ、ライフステージ全体の中で遺伝を見ることができます。これから産む子どものこと、自分の親のこと。家族全体を支援できるのが、このセンターが目指す姿とも言えるでしょう」

——最後に、読者のみなさんにメッセージをお願いします。

「病気を治すことも大切ですが、それ以上に患者さんが心から納得して次の一歩を踏み出せることが大切だと感じています。私たち遺伝医療に関わるスタッフが、患者さんの心の扉を開いてあげるような感覚で、これからも患者さんとご家族に寄り添っていきたいと思っています。どうぞお気軽にご相談ください」

臨床遺伝診療センターの現場

その人の語りに耳を傾け、人生の選択を支える「遺伝カウンセラー」

臨床遺伝診療センターで、遺伝カウンセラーとして患者さんとご家族に向き合う平岡さゆりさん。高校教員を経て医療の世界へ転身、さらに日本科学未来館のサイエンスコミュニケーターに挑戦するなど、多彩なキャリアを重ねてきた異色の経歴の持ち主です。「医療者じゃないバックグラウンドが、むしろ強みだと思っています」と話す平岡さんに、仕事への想いと、センターが目指す姿を聞きました。

平岡 さゆりさん
認定遺伝カウンセラー
認定家族相談士

1994年　早稲田大学　理工学研究科卒業。理学修士取得
2019年まで青山学院高等部にて理科教諭として勤務。
2020年　国際医療福祉大学　医療福祉学研究科卒業。
　　遺伝カウンセリング修士取得。
2023年　同大学院　博士課程卒業。臨床心理学博士取得。
　　日本医科大学附属病院、佐々木研究所附属杏雲堂病院、
　　日本科学未来館、愛育クリニックなどを経て
2025年より帝京大学医学部附属病院に勤務

遺伝カウンセラーの役割と、カウンセリングの流れ

遺伝カウンセラーの仕事は、遺伝性疾患を持つ患者さんとご家族の不安や悩みに寄り添い、専門的な情報をわかりやすく整理しながら、その人が納得できる選択をサポートすることです。

臨床遺伝診療センターでは、がん・神経疾患・循環器・産婦人科領域など多岐にわたる分野を平岡さんが横断的に担当されています。各診療科の「ハブ」として、どのような役割を担っているのでしょうか？

「遺伝・遺伝子の情報を診療科横断的に医療へ活

用する取り組みは、近年急速に発展した領域です。各専門医や関係部署がスムーズに情報共有でき、連携していけるような仕組みを構築するなど、院内の運用体制を整えています」

――一般的なカウンセリングの流れを教えてください。

「カウンセリングは、予約の電話からすでに始まっています。患者さんが何を聞きたいか、何を不安に思っているかを把握した上で、必要な資料や検査の情報を準備していきます。カウンセリング当日は、家族の病歴を丁寧に聞き取り、『家系図』として図に起こします。家族の病歴を可視化することで、遺伝の可能性やその種類、伝わり方の特徴、将来の発症リスクなどが見えやすくなります。そのうえで、どのような遺伝子検査が適切なのか、またその結果をどう活かせるのかを一緒に整理していきます。そして最終的に、ご本人が納得できる選択を一緒に見つけていきます」

――どれくらいの時間をかけてカウンセリングされていますか？

「1回のカウンセリングは最大1時間程度を想定しています。医師との役割分担も状況に応じて柔軟に調整しながら連携しています。最初の情報聞き取りや場の雰囲気づくりはカウンセラーが担い、遺伝子検査のオーダーや説明は医師と一緒に対応します。今年度からは専用の『遺伝カウンセリング室』がオープンし、より多くの方のニーズに応えられる環境が整ってきています」

目の前の患者さんに全集中

――カウンセリングで大切にしていることを教えてください。

「何より大切にしているのは、患者さんが語る『物語（ナラティブ）』を尊重すること。病気そのものだけでなく、何を感じ、どう生きてきたか、目の前の患者さんの語りに全集中して耳を傾ける。それらを理解することで、その人らしい意思決定のお手伝いをしたいと思っています」

――これから利用される方にメッセージをお願いします。

「遺伝子は、誰もが持っているものです。2人に1人がかかるといわれるがんも、細胞レベルでは遺伝子の変化が関わっています。日本ではまだまだ、ゲノムリテラシー（遺伝に関する知識や理解）が十分に浸透しているとは言えません。だからこそ、気軽に相談できる場所が必要だと考えました。まずは雑談でもいいので、私たちとお話ししましょう。私たちも気軽にお話しいただけるようなセンターを目指して、これからも努力を続けてまいります」

遺伝情報の特性

不変性	生まれながらの遺伝情報は原則、生涯変化しません。
予見性	将来の病気の発症可能性を予測できる場合があります。
共有性	近親度に応じて血縁者と一定の確率で共有します。
あいまい性	病気の遺伝子がわかっても、いつ発症するか、どの程度の症状かなどは個人差があり、確実にはわかりません。

保険収載されている遺伝学的検査
http://www.kentaikensa.jp/
注：これら以外にも多くの遺伝学的検査が自己負担（自費）で行うことができます。

各科の専門家が集う、チーム医療の現場から

臨床遺伝診療センターを支える12人の声

臨床遺伝診療センターには、院内のさまざまな診療科の専門医が関わっています。がん・神経疾患・腎疾患・小児疾患・産婦人科領域など、それぞれの現場で遺伝医療と向き合う医師たちに、チーム医療への想いとセンターの強みをお聞きしました。

盛田 幸司 先生
内分泌代謝・糖尿病内科　病院教授

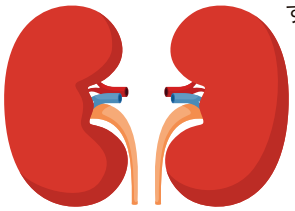
私たちは内分泌代謝・糖尿病領域の専門臨床を担当し、甲状腺・副甲状腺の超音波検査読影や臨床研究の指導にも携わっています。遺伝性疾患では、多発性内分泌腫瘍症・ミトコンドリア病・家族性高コレステロール血症・遺伝性糖代謝異常症など多岐にわたる疾患を診療しています。

帝京大学医学部附属病院は多職種が密に連携し、迅速かつ総合的な医療を提供できる点が強みでしょう。センターでは患者さんとご家族に寄り添った包括的なケアを実践しています。

柴田　茂 先生
腎臓内科　教授

腎臓内科には、アルポート症候群・ネフロン癆・先天性尿細管疾患などの遺伝性腎疾患の診療実績があります。

帝京大学医学部附属病院は診療科や職種間の垣根が低く、意識共有が速やかなのが特徴です。臨床遺伝診療センターは、長坂教授のリーダーシップのもと、エキスパートのスタッフが幅広い疾患に丁寧に対応しており、頼りになる存在です。



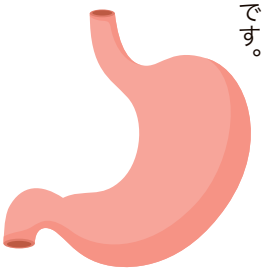
田代 晴子 先生
血液内科　教授

血液内科では白血病・悪性リンパ腫・多発性骨髄腫などの腫瘍性疾患から、血友病など出血性疾患、血栓性疾患まで幅広く診療しています。昨年から、一部の造血器腫瘍に対しては遺伝子パネル検査が保険診療内で行えるようになりました。この検査では、がん細胞に発現するがんの原因や予後に関わる遺伝子変異を探すとともに、正常な組織の遺伝子も同時に検査します。そのため、期せずして、生まれつき持っている遺伝子変異が見つかることがあり、そんな時も臨床遺伝診療センターに相談できます。その他、先天性血栓症の疑いなどでも、遺伝カウンセラーに相談し迅速に対応いただいています。

淺岡 良成 先生
消化器内科　教授

消化器疾患、特に肝疾患を中心に診療しています。遺伝性疾患では糖原病・ウィルソン病・進行性家族性肝内胆汁うっ滞・家族性腺腫性ポリポーシスなどを扱っています。

帝京大学医学部附属病院は各科の垣根が低く、他科の先生にすぐ相談できる環境が整っています。臨床遺伝診療センターには遺伝診療の知識が豊富な常勤カウンセラーが在籍しており、いつでも気軽に相談できるのが大きな強みです。



渡邊 清高 先生
腫瘍内科　教授

近年、がん治療ではがん遺伝子パネル検査などのゲノム医療が進展し、患者さん一人ひとりの遺伝子情報に基づく個別化医療が広がっています。一方で、検査によりご家族にも関わる遺伝性腫瘍が判明することもあり、適切な対応が求められています。帝京大学医学部附属病院では、臨床遺伝診療センターと帝京がんセンターを中心に、多職種が連携したチーム医療を展開しています。医師、薬剤師、看護師、認定遺伝カウンセラーなどが協働し、検査結果の解釈や治療方針を多角的に検討しながら、患者さんとご家族の不安に寄り添った支援を行っています。遺伝カウンセリングやご家族への助言も含め、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群やリンチ症候群などに対応し、ご家族を含めた継続的な健康管理を支える体制が整えられています。

斉藤 史明 先生
脳神経内科　教授

脳神経内科医として、アルツハイマー病・パーキンソン病などの難病から脳梗塞まで、多様な疾患の診療にあたっています。遺伝性疾患では、脊髄小脳失調症・ハンチントン病・筋ジストロフィー・ミトコンドリア病・脊髄性筋萎縮症など多くの疾患を扱っています。

帝京大学医学部附属病院は多職種が患者さん目線で連携し、頻回のカンファレンスで情報共有を徹底しています。センターの自慢は、フットワークの軽さ。遺伝子検査へのアクセスや遺伝カウンセリングへの対応も迅速です。

池田 達彦 先生
乳腺外科　講師

乳腺外科で乳がん診療を中心に、内分泌腫瘍も担当しています。遺伝性乳がん・卵巣がん症候群（ＨＢＯＣ）、ＭＥＮ１・ＭＥＮ２などの遺伝性疾患の診療を行っています。

帝京大学医学部附属病院の強みは、幅広い診療科のエキスパートが揃っていること、そして優秀な遺伝カウンセラーがいること。センターは長坂先生のリーダーシップと、遺伝カウンセラーの皆さんの手厚いサポートが自慢です。

落合 大樹 先生
下部消化管外科　教授

帝京大学医学部附属病院の下部消化管外科では、抗癌剤化学療法チーム、炎症性腸疾患チーム、大腸手術チーム、創傷治癒・人工肛門ケアチームなど、数多くのチームを編成しています。外科医をはじめ、内科医、放射線科医、病理医に加え、薬剤師、看護師、ＭＳＷ、退院支援看護師、栄養士などが病棟・外来で連携し、専門職種間の垣根をなくして日常的な情報共有を迅速に行っています。また臨床遺伝診療センターでは、センター長と認定遺伝カウンセラーを中心に定期的なミーティングを開催しています。専門分野を越えて多くの遺伝性疾患に向き合い、幅広い年代の患者さんに対して長期にわたるケアを行っているのが特長です。家族性大腸腺腫症やＨＥＲＭＡＮＳＫＹ ＰＵＤＬＡＣＫ症候群など、さまざまな遺伝性疾患に対し、患者さんとご家族に寄り添った支援を続けています。

三牧 正和 先生
小児科　主任教授

小児医療・小児保健の充実のため、日々診療・教育・研究に従事しています。ダウン症候群・ウィリアムズ症候群などの先天異常症候群、てんかん症候群・筋ジストロフィーなどの神経・筋疾患、先天代謝異常症や神経皮膚症候群など、幅広い遺伝性疾患の診療を行っています。

帝京大学医学部附属病院は多領域の専門家が揃い、診療科間の垣根が非常に低いのが強みです。臨床遺伝診療センターでは、各診療科の専門家が横断的に参画し、経験豊富な遺伝カウンセラーと遺伝専門医が丁寧に対応しています。

瀬山 貴博 先生
産婦人科　准教授

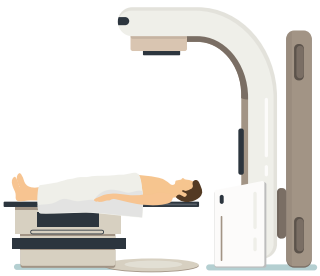
普段は周産期医療に従事し、妊娠・分娩の管理を担当しています。帝京大学医学部附属病院は総合周産期母子医療センターとして、切迫早産や妊娠高血圧症候群など、さまざまなリスクを有する妊婦さんを受け入れており、多職種チームによる最適な医療の提供を目指しています。

現在は、ＮＩＰＴを中心とした出生前診断に取り組んでおり、当院は出生前検査認証制度における基幹施設として認定されています。診療科の垣根が低く他科へ迅速に相談できる環境のもと、臨床遺伝専門医と遺伝カウンセラーを中心とした横断的な診療体制が、着実に整いつつあります。

近藤 浩史 先生
放射線科　教授

放射線画像診断専門医として、IVR（画像下治療）による低侵襲な診療に従事。遺伝性疾患ではオスラー病（HHT）の包括的な診療を実践し、画像診断からIVR・長期経過観察までをトータルで担っています。

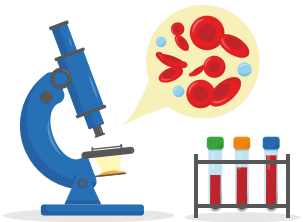
帝京大学医学部附属病院は診療科の垣根が低く、多科連携がスムーズなのが強み。センターは遺伝子検査にとどまらず、患者さんとご家族の「これから」に寄り添う、心の通ったカウンセリング体制が自慢です。



横山 直之 先生
臨床検査科　教授

臨床検査科科長・中央検査部部長として検査室を管理するとともに、循環器内科専門医として心臓アミロイドーシス・肥大型心筋症・ファブリー病・QT延長症候群などの遺伝性疾患の診療も担っています。

中央検査部では正確なデータを出すだけでなく、多職種をつなぎ診療判断を支える役割を担っています。センターでは遺伝カウンセラーと一緒に診療を行うことで、患者さんとご家族に寄り添う医療が実践できるようになりました。



業種別 INTERVIEW

その葛藤ごと、聞かせてください

患者さんの心に、いちばん近い看護師の立場から

臨床遺伝診療センターで看護師として患者さんに寄り添う梅井彩さんにお話を伺います。

「遺伝カウンセリングを受けた後、患者さんの率直な思いや理解の度合いをお伺いするのが私の仕事です。患者さんやご家族と接する機会が多い看護師だからこそ、お一人お一人の遺伝に対する考え方をしっかり伺い、正しい理解につなげていくことができると思っています」

――院内ではどのような連携をしていますか？

「必要に応じて、他科の医師や看護師とも連携しながら、多職種でのカンファレンスを通じてチーム全体でケアを考えていきます。現在、センター担当の看護師は私ひとりですが、どの看護師にとっても患者さんに寄り添うのは基本の仕事。みんなで協力して行うことを心がけています」

――患者さんと接する際、心がけていることを教えてください。

「以前、乳がん・卵巣がんの遺伝的リスクを持ち、予防切除について迷う患者さんがいらっしゃいました。私は患者さんに長生きをしてほしいという想いから、つい切除を勧めたくなってしまったんです。でも、本当にそれが正解なのだろうかと思い、自分の母親に相談したところ『娘の体が切られるのは考えられない』と予防切除について反対の意見を言われました。親子でもこんなに価値観が違う。命さえ救えればその人が救われるわけじゃないと、本当に考えさせられました。それ以来、可能な限り病気に関する情報を幅広く収集し、患者さんの立場で考え、寄り添うことを心がけるようになりました」

――とても明るく元気な梅井さんですが、元気の源はどこからやってくるのでしょうか？

「私が患者さんから元気をもらってばかりなんです。抗がん剤治療を続けながら生き生きと過ごす患者さんの姿が、何より私の活力かもしれませんね。何事も感情を溜め込まないことがポイント。泣いたり笑ったり、我慢しないように過ごすことが、自分のメンタルを保つコツかなと思っています。患者さんの喜びにも悲しみにも寄り添っていきたいです」

――これからの目標を教えてください。

「患者さんに安心して頼りにしてもらえる看護師でありたい。そのために、新しい医療の知識やスキルを増やし続けていきたいと思っています。これからも多職種の方々のお力を借りながら、前に進んでいきたいです」

梅井　彩さん　看護師

2002年　看護師免許取得

業種別 INTERVIEW

「なぜこの薬が必要なのか?」を説明する

治療を安全に続けるため、薬剤師ができること

臨床遺伝診療センターで薬剤師として患者さんへの薬剤管理・治療支援を担う武井優輝さんにお話を伺いました。

「遺伝医療の中でも、がんに関するお薬を扱う場合、効果が出てくるまで飲み続けなくてはならないことが多くあります。副作用が起きたときの対処法を説明したり、お薬を先生に提案したりすることが、薬剤師の大切な仕事のひとつです」

――遺伝性疾患の治療薬にはどのようなものがあるのでしょうか?

「遺伝性疾患の治療薬は、毎日飲み続けても効果を実感しにくいことがあります。そのため、自己判断でやめてしまう患者さんも少なくありません。抗がん剤の場合、飲まなくてもすぐには症状が出てこないことが多いのですが、その間に病状が進行してしまうと、もうお薬が効かなくなってしまうこともあります。だからこそ、背景をしっかり説明して、患者さん自身に飲む意味を理解してもらうことがとても大切です」

――患者さんとのやり取りの中で、印象に残っている出来事を教えてください。

「どうして自分にその薬が必要なのか、なかなか理解が進まなかった患者さんに、遺伝的背景から薬の作用機序まで、時間をかけて丁寧に説明し続けました。『治療の意味がわかった』と言っていただけたときは、とても嬉しかったです。前向きに治療に取り組もうとしてくださるのを見て、患者さんの意思決定を支えられたと感じました」

――他職種のメンバーとはどのように連携されていますか?

「センターの移転により、外来化学療法室と臨床遺伝診療センターが近い距離になりました。これまでは、センターでどのような活動が行われているかをなかなか把握しきれていなかったのですが、距離が近くなったことで、気軽に声をかけてもらえるようになったと感じています。これからは、さらに連携を深めていきたいです」

――これからの目標をお聞かせください。

「今後は薬剤師外来の機能を拡大し、遺伝性疾患の外来患者さんにも薬剤師が介入できる体制を整えていきたいですね。看護師・栄養士・リハビリスタッフなど多職種との連携をさらに深め、薬剤師として、部署間の橋渡し役になれるように取り組んでいきたいです」

武井 優輝さん　薬剤師

2008年　帝京大学薬学部卒業
2010年　千葉大学医学薬学府　修士課程　卒業
2010年　帝京大学医学部附属病院　薬剤部

遺伝医療に関する基礎知識とQ&A

遺伝子検査や遺伝カウンセリングについて、「どんな検査なの？」「相談したらどうなるの？」など、気になることはさまざまです。ここでは患者さんやご家族からよく寄せられる疑問に、わかりやすくお答えします。

「遺伝」と聞くと、「生まれつき決まっているもの」というイメージを持つ方も多いかもしれません。

遺伝子とは、私たちの体をつくるための「設計図」のようなもの。その設計図に生まれつきの変化があることで、特定の病気が起こりやすくなる場合があります。近年は検査技術が進歩し、がんや生活習慣病をはじめ、さまざまな病気と遺伝子の関係が明らかになってきました。

大切なのは、病気について理解することで「不安」を増やすのではなく、より良い「選択肢」を増やすこと。帝京大学医学部附属病院の臨床遺伝診療センターでは、専門チームが患者さんとご家族に寄り添いながら、一緒に考えていきます。

Q1 遺伝子検査とは、どんな検査ですか？

A 血液や組織などからDNAを抽出し、遺伝子や染色体を調べる検査です。病気の原因を特定したり、将来の発症リスクを知ったりするために行われます。すべての人が受けるものではなく、医師やカウンセラーと相談のうえで、患者さんの意思によって実施されます。

Q2 遺伝子の変化があると、必ず病気になるのですか？

A 「必ず」ではありません。遺伝子に変化があっても発症しない場合や、生活習慣や環境によって発症リスクが変わる場合もあります。専門家と一緒に確認することが重要です。

Q3 遺伝カウンセリングとは何ですか？

A 遺伝に関する疑問や不安を、専門の医師・遺伝カウンセラーと共に整理し、相談する場です。検査を受けるかどうかの相談から、結果の意味の説明、今後の生活や家族への影響まで、幅広くサポートします。「話を聞いてもらうだけ」でも構いません。

Q4 遺伝カウンセリングは、家族も一緒に受けた方がいいですか？

A 遺伝の情報はご家族にも関わるため、ご家族が同席されることもありますが、必須ではありません。「家族に知らせるべきか」「どう伝えればよいか」といった悩みも、カウンセリングの中でご相談いただけます。

遺伝カウンセリングの流れ

1. 初回面談（問診・状況確認）
   30分～1時間程度

2. 必要に応じて遺伝子検査の実施

3. 結果の説明・カウンセリング

4. その後のフォローアップ

当院の遺伝カウンセリングについては、上の二次元コードからウェブサイトをご確認ください。

Q5 検査や相談の結果は、家族に伝えなければなりませんか？

A 原則として、結果をご家族に伝えるかどうかはご本人の意思が尊重されます。「誰に・いつ・どのように伝えるか」についても一緒に考えていきましょう。

Q6 遺伝子検査を受けたら、保険や就職に影響しますか？

A 日本では現在、遺伝情報を理由とした保険加入や採用の差別を禁止する取り組みや法の整備が進められています。不安に感じる方は、カウンセリングの際にご相談ください。

Q7 受診するにはどうすればいいですか？

A かかりつけ医や他科の担当医からの紹介があれば受診できます。「自分が対象になるかわからない」という方も、まずはお気軽にご相談ください。帝京大学医学部附属病院 臨床遺伝診療センターでは、患者さんとご家族に寄り添った相談体制を整えています。

安心と信頼を支える採血の現場

帝京大学医学部附属病院では、毎日５００名以上の患者さんの採血を行っています。外来患者さんの採血を担当している中央検査部森山亜美さんにお話を伺いました。

「外来の採血を担当しながら、糖尿病療養指導士として、自己血糖測定器の導入や指導にも携わっています。当院は大学病院のため、患者さんの年齢も幅広く、一日に沢山の患者さんの採血をしています。マスク越しでも笑顔が伝わるよう意識しながら、患者さんが相談しやすいと感じていただける雰囲気づくりを心がけています」

――他部署との連携も多いと思います。チーム医療を行う上で、心がけていることを教えてください。

「医師や看護師だけでなく、栄養士や薬剤師を交えたカンファレンスに参加し、密に情報共有を行っています。検査技師としての視点に加え、医療従事者それぞれの多様な視点を知ることができるため、学びの多い環境だと感じています。皆さんとてもフレンドリーな方が多く、職種に関係なく意見を交わし合えることも、当院の特徴の一つだと思います」

――印象に残っている出来事はありますか？

「当院では、定期的に『糖尿病教室』を開催し、情報発信を行っています。先日、自己血糖測定器の使い方についてレクチャーを行う機会がありましたが、発表後に参加者の方から感謝の言葉やさまざまなご質問をいただき、とてもうれしく感じました。

なお、毎年11月14日は『世界糖尿病デー』とされています。糖尿病は現代人にとって身近な病気でもあるため、多くの方に知っていただきたいと思います」

――読者のみなさんや一緒に働く仲間たちにメッセージをお願いします。

「中央検査室としては、患者さんの血液検査結果を正確に医師へお伝えすることが最も重要だと考えています。今後も、これまで以上に連携を深めながら、患者さんやそのご家族の皆さんに安心していただけるよう、日々努めてまいります。

『糖尿病教室』は当院を受診されている方、入院中の患者さんを対象として開催しています（参加費は有料となります）。詳しくは、当院ウェブサイト▼病院のご案内▼各部門のご案内▼栄養部ページの下部をご確認ください。

MY FAVORITE

旅行が好きで、先日もフランスとスペインに行ってきました。次はイギリスに行きたいと思っています。

森山 亜美さん　中央検査部

2020年　群馬パース大学 卒業
帝京大学医学部附属病院中央検査部 入職

ウェブマガジン　T-ch「ティーチ」

ホームページ上で気軽に読んでいただけるようなウェブマガジンT-ch「ティーチ」。
T-ch「ティーチ」は、各専門分野の疾病や治療方法などを紹介するウェブマガジンです。

- T：Teikyo＝帝京大学医学部附属病院の頭文字
- ch：Channel「チャンネル」
- TeikyoWebChannelを略して〝T-ch〟としました

また、「ティーチ」には「teach＝教える」と意味も込められています。当院の様々な取り組みを発信するページです。

帝京大学医学部附属病院ホームページ
04 病院のご案内 ▶ ウェブマガジン T-ch「ティーチ」
より閲覧できます。

または右記の二次元バーコードをスマホで読み取っていただくと、直接閲覧できます。
ぜひご覧ください。

ウェブマガジン　T-ch「ティーチ」コンテンツ一覧

No.1	CKDってなに？
No.2	肝臓・膵臓とアルコールについて　ー耳の痛くないお話ー
No.3	妊娠と薬の話
No.4	突然線が曲がって見えたら？
No.5	わかってきたアトピー性皮膚炎
No.6	においがしない？ 好酸球性副鼻腔炎の話
No.7	神経のはたらきは、数字で表せるのでしょうか？
No.8	うつ病の最新治療 rTMS　ー磁気で脳をやさしく活性化ー
No.9	新しい狭心症とは
No.10	『おいしく食べる』ということは、人生の楽しみそのもの！！　ー今日からできる摂食嚥下ケアー
No.11	背中からの痛みどめ ～硬膜外麻酔

P.2
クロスワードの答え

イ デ ン

理念

患者そして家族と共にあゆむ医療

基本方針

安心安全な高度の医療
患者中心の医療
地域への貢献
医療人の育成
医学研究の推進

Teikyo University Hospital
チーム T-me
帝京大学医学部附属病院
院内誌

TEIKYO

帝京大学医学部附属病院

〒173-8606 東京都板橋区加賀2-11-1
TEL.03-3964-1211（代表）
https://www.teikyo-hospital.jp/

院内誌についてのお問い合せ先
帝京大学医学部附属病院 広報委員会